慰霊と遺骨収集

沖縄戦から78年、体験者が少なくなり、戦争が遠い過去のことと考えてしまいがちな現在、地域には戦争で命を落とした人を祀る慰霊碑（塔）があります。一方、全県では今もなお3000人の遺骨が未収骨の状態にあるとされています。今回は慰霊と遺骨収集というテーマで恩納村の戦争を考えます。

◆戦場での死者への対応と遺骨の行方

（恩納岳山中で命を落とした）「母の亡きがらの処置に困りました。私たち弟妹だけではどうすることもできません。そこにいる人びとに頼んでもだれもきいてくれません。やっと通りがかった数人の朝鮮の人夫が山奥まで運んでくれました。（中略）やっと人ひとり横になれるくらいの穴を掘り、母を野ざらしにすることだけはまぬかれました。弟妹6人で土をかぶせ、周囲に小石を並べ墓標とし、母に最後の別れを告げました」

（那覇市史 資料編第2巻中の6）

「屋嘉道出口の端まで来たとき、同行していた宮里小のタンメー（おじいさん）が栄養失調と老衰のため息を引き取ってしまった。（中略）私たちは先を急ぐため、タンメーを適当な場所に葬ることもできず、道路脇に寝かして、その場を立ち去らなければならなかった」

（恩納村民の戦時物語）

避難住民の中には日米両軍の戦闘によって、戦場を逃げ惑い、自らの命を守るために家族の遺体を埋葬できずにその場を立ち去らなければならなかったケースもありました。また恩納岳は第二護郷隊の戦闘地域であったため、遊撃戦に参加した護郷隊員や中部から移動してきた日本兵も多く戦死しました。しかし、「戦死」という政府からの公報のみで、どこで亡くなったかもわからず、全ての遺骨が家族のもとへ帰ることはできていません。

◆恩納村の遺骨収集

激しい戦火をくぐり、厳しい避難生活を乗り越えて、生き残った村民は、石川、羽地、金武、宜野座に収容されました。最も早く帰村することができたのは山田の住民で、1945年9月17日のことです。その後、次々と自分たちの故郷へ帰ることになりますが、戦争で家屋が焼失したため、テントでの共同生活という厳しい状況での戦後のスタートでした。また米軍からの配給だけでは足りないため、帰村した住民は食糧を確保するために耕作を再開しました。しかし山野には遺骨も散在していたため、農作業と遺骨収集を同時にしなければなりませんでした。遺骨の特定ができる場合にはそれぞれの家族のもとへ帰る事ができましたが、身元が特定できない遺骨は別途集められ、当時那覇市の識名にあった中央納骨所に納められました。字恩納周辺で収骨された遺骨は現在の万座毛入り口そばの「龕屋（がんやー）」附近にカマス（ムシロをふたつ折りにして両端を縫って袋状にしたもの）に入れられ、一時的に置かれていました。現在は米軍キャンプ・ハンセンがあり、立ち入ることができませんが、村の援護業務に携わった方の話によると、完全に収集することはできず、恩納岳周辺の山々にはまだ遺骨があると思われます。

恩納区の龕屋

◆恩納村遺族会

恩納村遺族会は1953年5月に結成されました。結成以来、戦没